

「オイ、又あんな奴が一人殖たで、オイ、あばゝの茂平と違ふか。」

「そうや、皆寄場に集まつてるが、お玉の噂をしてるのと違ふか。」

「そうや、今お玉の惚氣を云はれて、おまけに顔を掻きみしられよつたところや。」

「オイ、すまんがお玉の事なら云はんとおいてや、此所にあばゝの茂平はんと云ふ色男が居るねんさかい。」

「茂平どうした。」

「どうの、こうのて皆、もつと前へ寄つて聞いて呉、今俺が土橋の下で大根を洗ふて居たらお玉が通りよつたんや、オイ、玉ちゃん何處へ行くねん、と尋ねたら、誰かと思ふたら、あばゝの茂平はんやおへんか、オイ玉ちゃん、此間から手紙をやつてるのに返事も無いが一體どう仕て呉るねん、サア今此所で逢ふたは和尚直々の勸化、サアウンと云へばよし、否と云へば此の鎌が、ド



えんぞ
かき

で……今晚わたしは……お玉の所へ……忍んで……参ります……エライヤツヤ……コラ……ドツコイサノ……チヨイト〜。」

テツ腹へお見舞申すぞ、否か應か、ウンか鎌か、ウン鎌かと云ふてやつたらお玉奴ナア、あばゝの茂平はん……そんな……手荒い事せいでも……あんなの事なら……遠からウンでおますがな、と云ふてナ……俺の顔を尻眼でジイーと見てナ、ニタツと笑い、よつたんで、ウンならえい一寸話があるさかい向ふの辻堂まで来て呉、と云ふたらお玉が、晝此の様な所で二人が話を仕て居る所を村の若いお方に見附けられたら又おかしい噂が立といかんさかい、今晚夜中の鐘を合圖に裏から忍んで来とくなはれ、切戸を開て待てます、とお玉が……云ふた